



## 西王母と女媧：二人の神

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 重信, あゆみ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00016920">https://doi.org/10.24729/00016920</a>

## 論文要旨

### 西王母と女媧—二人の神—

重信 あゆみ

本稿では西王母と女媧について考察した。文献上、西王母と女媧は接触がない。そのため、西王母と女媧を比較考察した論考もほとんどない。しかし、図像では、西王母と女媧が同じ画面にあらわれるものがいくつもある。それらの図像を丹念に考察すると、当初は女媧が天帝としてあらわされていた。のちには女媧は西王母の侍臣のようになっていく、という流れをみることができる。これは当時の死生観にもとづく宗教観念の変化ととらえることができる。

西王母は道を体得した神とされる。『莊子』大宗師篇の中で「西王母得之」とある。「之」とは道である。女媧は天帝とされる。馬王堆帛画で上部中央に単独で描かれる。曾布川寛は「天帝」と解している。

西王母と女媧は文献上は関わらないが、図像を子細に検討することにより、影響関係を明らかにした。楊利慧は「女媧は西王母の部下あるいは姉妹であった」と述べる。しかし根拠は不明である。画像石では女媧は伏羲とともに描かれる。河南唐河針織廠墓（前漢）では女媧は伏羲とともに墓の奥の主室に描かれている。女媧は天帝であった名残りかもしれない。

山東沂南漢墓（後漢）で西王母は墓門に描かれる。これは西王母が門番として認識されていたためであろう。

山東微山縣兩城鎮出土（後漢中晩期）では西王母を中心として女媧と伏羲が両側に侍臣のように配されている。女媧と西王母の立場が逆転したといえる。

第一章ではさまざまな西王母について考察した。「道を得た（『莊子』）」「人のようで豹尾虎齒（『山海經』）」、「帝の女（『穆天子伝』）」、「不死の薬を持つ（『淮南子』）」、「西王母の書をもつものは死なない（『漢書』）」「門番としての西王母（画像石）」、「仙女を統括する（『漢武帝内伝』）」と、さまざまな西王母像を考察した。

『山海經』西山経の「如人」、「豹尾虎齒」が西王母の姿を説く最も古い資料である。小南一郎がいうように「人と獣の中間のような姿」であり、後の時代

の仙女としての西王母とはかけ離れている。『山海経』では「司天之厲及五殘」と災いや刑罰を司る。当時の人々はこの神を祀って疫病や災い、刑罰を避けようとしたのだろう。北斗信仰に似ている。北斗は死を司る。祈ることにより死を免れるのである。

小南は西王母が「いささか異民族的な性格を備える神」としている。後漢に属する四川省の西王母は龍虎座という座席に座っている。これは西方の神と似ている。

西王母は女神とされるが、『山海経』では西王母が女性であるという記述はない。山東滕州市桑村鎮西戸口村出土（後漢早期）の画像石に、髭を生やし男性の特徴を示すものがある。「田王母」と記されているが、隸書では「西」と「田」が似ており、「田王母」は「西王母」と見なされている。清の趙翼は「王母寡」の例を挙げ、「母」と記されても女性とは限らないという。男性かも知れない。馬王堆帛画の地下世界の「力士」は西王母であった可能性がある。西王母は『山海経』で穴処している。『列仙伝』では石室にいる。地下の神である。大形徹によると「力士」はエジプトの神であるベスであるという。李松は西王母は外来の女神の影響を受けているとする。

『穆天子伝』では、西王母が自身のことを「帝の女<sup>むすめ</sup>」と称し、女性である。

前漢末期の哀帝の頃に西王母信仰が爆発的に広がる。『漢書』五行志には「母告百姓。佩此書者不死」と西王母が死を避ける神であったと記される。西王母は人々にとって、より身近な神となった。

六朝期のものであろう『漢武帝内伝』や『漢武故事』には、西王母が漢武帝に桃を渡し、共食する場面が描かれる。西王母と穆王の共食場面を描いた『穆天子伝』をふまえての記述であろう。

梁、陶弘景の『真誥』に「入天門。揖金母拜木公」とある。これは画像石墓で墓門に描かれていることと関係があるようにみえる。墓門に描かれることが東王父を生み出すひとつの要因となったと考える。「西」に対して「東」、「母」に対して「父」という対の観念により、西王母に対して東王父と名付けられた。このとき、「母」は音訳ではなく「母」と認識されていたことが分かる。

第二章では女媧について考察した。文献の記載や図像により、女媧の役割は「生み出す」、「化す」であった可能性について言及した。前漢、馬王堆帛画上

部中央に描かれている神は女媧である。上半身が女性で下半身が蛇の姿で描かれる。小島瓔禮は、蛇は脱皮し、生まれ変わったようにみえることから、不死や再生のシンボルと考える。女媧の下半身が蛇であるのは、再生を司る象徴のように思われる。馬王堆帛画が、被葬者の復活再生を願って描かれたのだとすれば、被葬者は、天界の女媧のところにまで昇っていき、天界に生まれかわることになる。

女媧は『楚辞』天問が初出である。「女媧有体、孰制匠之」とある。この記述では、女媧の体を作ったのはだれかということが問題となっている。

『山海経』大荒西経では、「神有十人、名曰女媧之腸。化為神、処栗広之野、横道而処」と記載され、「化する神」である。

睡虎地秦簡『日書』に「女果」という神がみえる。大野裕司は、これを「女媧」とし、「女子事」（妊娠、出産）を司る神であるとしている。ここでは女媧は生み出す神である。

河南唐河針織廠墓の画像石では女媧と伏羲の間には「高媒神」とされる人物が描かれている。『風俗通義』（逸文）には、「女媧祠神祇而為女媒、因置婚姻」と記載されている。「高媒神」自体も実は女媧が変化したものである可能性がある。

第三章では、女媧と西王母の図像における関係を考察した。「女媧・伏羲」と「西王母・東王父」がともに描かれている図像を取り上げ、その配置の変化より「女媧・伏羲」と「西王母・東王父」の立場が逆転をしていることを指摘した。

曾布川寛は馬王堆帛画の帛画を上・中・下に区分する。上段を天上、中段を地上、下段を地下の世界とみなしており、帛画の中心テーマは墓主人の昇仙であるとする。そして昇仙の経路を下祭から崑崙山までとし、天帝の所まで昇るのかについては分からないとしている。また、地下の水の世界もまた大地を支えるモチーフを中心に展開しているとしている。

筆者は地下の水の世界・地上・天上は連続した昇仙のモチーフであると考え、地下に沈んだ太陽は湯谷で湯浴みをして、扶桑の枝の先から新しい太陽として生まれ出る。同様に墓主も埋葬された地下の世界から地上を経て、天上の女媧の所にゆき、復活再生するのではないだろうか。

馬王堆帛画の復活再生の構図は画像石墓においても受け継がれることとなる。例えば、河南唐河針織廠墓出土の画像石では、女媧と伏羲は北主室北壁西端に描かれている。これは、おそらくは、女媧が天帝、あるいは天帝に近い存在として認識されていたからであろう。しかし、女媧単独ではなく伏羲とともに描かれている。この画像石墓では西王母と東王父は描かれていない。馬王堆帛画も河南唐河針織廠墓出土の画像石も前漢である。

後漢の山東嘉祥縣武宅出土の画像石では前石室の入り口、西壁上石に西王母が描かれ、東壁に東王父が描かれる。そして前石室屋頂には女媧と伏羲が描かれる。女媧と伏羲は屋頂の画像石の二層目に描かれ、一層目に笏を持つ人物が神人などを迎え入れるように描かれている。

後漢の山東沂南漢墓の画像石では墓門に西王母・東王父が描かれる。そして東王父の上に女媧・伏羲がともに描かれる。また同時代の山東微山縣兩城鎮出土の画像石には西王母が中央、左右に女媧と伏羲を配するという構図で描かれている。女媧と伏羲は西王母の侍臣のようである。図像の世界では、この段階で、女媧と西王母の立場の逆転がおきているようにみえる。当初、女媧は天帝であったのが、しだいにその地位が低下したことを示している。それにつれて女媧のもつ再生観念も薄れてきたと思われる。

第四章では、西王母の源流の一つがエジプト由来のベスである可能性について言及した。西王母が外来の神であることは小南一郎など多くの研究者が述べる。ベスは子供や女性を悪霊から守る神とされる。ベスはライオンの姿で豹皮の貫頭衣を着ている。ベスの図像には豹の尾のついたものもある。そのため、「豹尾虎齒」とされる西王母によく似ている。その辟邪という役割も共通する。さらに両者は地下世界に属している。ベスは中央アジアのアルタイ地方でも発見されており、エジプトから東にも広がりを見せていたことがわかる。大形徹は馬王堆帛画の力士を、その姿形の類似から、ベスではないかと推測している。そうであるならば、「ベス≒力士≒西王母」という構図を描くことができる。

荊州の三段式の鏡（後漢）には子供を抱く女媧が描かれている。これはホルスを抱くイシスに似ている。キリストを抱くマリア像がイシスにもとづくであろうことは、よく知られている。イシスの図像が中国にまで伝播したとすれば、それは女媧であろう。

それらを馬王堆漢墓に適用させれば、帛画の女媧はイシスのイメージを投影された天神で、西王母はベスのイメージを投影した地下の神として描かれていたことになる。そうであればエジプト的な復活再生観念の影響を受けて、ある時期の中国の死生観が生み出されたことになる。

おわりにでは、文献上では知り得ないことが、図像の世界を手がかりとして解明されるかもしれないことを述べた。前漢の馬王堆帛画では、女媧は天帝である。力士が西王母だとすれば、地下の世界の神である。しかし、後漢の山東微山縣兩城鎮出土の画像石では西王母が中心となり、女媧と伏羲がその侍臣として描かれるようになる。これは女媧の地位が低下し、西王母との立場が逆転したことを示している。のちに西王母は道教に取り込まれ、重要な神とされていくのである。(3975字)